

ベルブックス

旅する女人

永井路子



ベルブックス
旅する女人
¥ 380

昭和47年 9 月15日 初版発行

著者 永井路子

発行者 松田清

発行所 日本交通公社

東京都千代田区丸ノ内1—6—4
郵便番号100 編集部電話256-3481

送料 実費共130円

振替 東京 29403

印刷所 祥美印刷株式会社

© 永井路子 1972 無断転載複製を禁じます

47-100

Printed in Japan 0226-6424-5847

旅する女人

永井路子



日本交通公社

女の旅姿
せんのめいん こしやきようきつし
 国宝扇面古写経冊子より



大阪四天王寺蔵
 (写真提供・文化財研究所)

目次

歴史に生命いのちをかけて／持統天皇

宿命への旅立ち——筑紫へ——

二〇

紫草のかげに——近江へ——

二四

追わるるごとく——飛鳥へ——

三〇

決意の日——宮滝を発つ——

四一

蒼き川への訣別——峠越え——

四七

命運を賭けて——伊賀へ——

五三

深沈たる瞳——吉野へ——

六七

あずま路のはてより／「更級日記」の著者

まだ見ぬ国への飛翔

六

はるかなる旅

六

物語の世界へ

一〇二

淡い残照のなかに

一〇六

旅路の終わり

一三

愛の終わりの感傷旅行／「とほずがたり」の二条

数奇なる愛のなかへ

一三〇

愛憎のはてに

一三七

東国―武士の世界

一三四

めぐりあい

一四三

涙せきあえず……

一四九

札所めぐり・母子抒情／沓掛なかり

平凡さの魅力

一六六

商家の実力女性

一六九

秩父への道

一七六

現代に生きる札所とは？

一八三

亡き子をしのびつつ

二〇〇

口絵―扇面古写経冊子にみる女の旅姿

市女笠いちめがさをかぶった旅の女はどこへゆくのか。井戸端にいる庶民の女たちの話す声も聞えて来そうなの風景は、平安末期の風俗を伝える貴重な遺品である。これは、扇の地紙に風俗や風景を描き、その上に法華教ほけきょうの経文を書いたもので、十二世紀ころの作といわれているから、ちょうど「更級日記」と「とはずがたり」の中間の時代ということになる。おそらく旅の女人の姿は「更級日記」や「とはずがたり」のころもほぼ同じとみてよいのではないか。

歴史に生命いのちをかけて

持統天皇

宿命への旅立ち　―筑紫へ―

吉野は山の国であり花の国でもある。が、いま、吉野という名から、私が何よりもまず思いうかべてしまうのは、山脈やまなみの裾を流れる川のすがたなのだ。水の青とよぶにはやや硬質な、翡翠ひすいいろのその碧あおさは、山峽を流れる川ならどこでも目にできるものなのだろうが、とりわけ、この色が私の心を捉えて離さないのは、その色に重ねあわせて、かつてこれを眺めた一人の女性の深々とした眼差まなざしを思い出すからかもしれない。

そのひとの名は、鸕野うのさののひめみこ讚良皇女、のちの持統天皇――古代史の中に、他の追隨を許さない印象的な足どりを刻みつけていった女性である。

その生涯のうちに、彼女は驚くほど各地に旅をしている。飛鳥あすかから九州へ、そして近江おうみへ、さらに吉野へ、吉野から伊賀、伊勢へ。しかもそれぞれの旅が彼女の運命を大きく変えただけでなく、日本の歴史の変動と深くからみあっていた。

彼女が旅をすることによって、ふしぎと日本の歴史が変わってゆく、とでもいったらいいだろうか。

とりわけ吉野への旅、そして吉野からの旅は、彼女自身にとつても命がけのものだったし、日本の歴史が始まって以来の大兵乱を生みだす旅でもあった。その記憶のなまなましきのゆえか、晩年女帝として藤原京に君臨してからも、彼女は、ほとんど狂おしいまでに吉野への旅を重ねている。

運命の星——という言葉がある。

ドラマチックな旅をしつづけた生涯にふさわしく、彼女はその誕生のときから、すでにある宿命を背負って来たもののようである。生まれたのは六四五年、ちょうど大化改新の行なわれた年だった。もっとも、宮廷で権臣蘇我入鹿が殺されるという血なまぐさいクーデターが行なわれたそのとき、すでに彼女はこの世に生を享けていたのか、もしくは未だか、そのあたりのことは定かではない。いずれにしても、無心に眠り続ける嬰兒が、その事件について何一つ知るはずもないのだが、にもかかわらず、その年の彼女の誕生は、かなり象徴的な事件だといっている。なぜなら、クーデターの中心人物、中大兄皇子は彼女の父だし、母は中大兄の片腕となつて働いた蘇我倉山田石川麻呂の娘、遠智娘だったからだ。

祖父の石川麻呂は、このとき同じく蘇我氏でありながら、入鹿打倒の側に廻った。彼自身、入鹿らを倒して蘇我一族での主導権を握ろうという野心に燃えていたとも、中大兄側が彼をそ



そのかしたともいう。してみれば、事件以前に行なわれた遠智娘と中大兄の結婚は、なかなか意味深長だ。しかも中大兄に石川麻呂の娘をすすめたのは大化改新の参謀役だった中臣（藤原）鎌足かまたりだというから、二人の結びつきは、あきらかにクーデターの下工作と見てもいいのではないかと思う。

六四五年、クーデターはみごとに成功した。そしてそれと年を同じくして遠智娘は鸕野（讚良）皇女を生む。その前にも彼女は一女をあげているが、この革命の年に生まれた皇女こそ、まさに大化改新の生んだ宿命の子といえるかもしれない。

もっともクーデターに成功しただけでは、皇女の父、中大兄は権力の座につくことはできない。その間には蘇我系の古人皇子ふるひとのみこの謀叛むほんがあったりして、中大兄の叔父にあたる輕皇子かろのみこが即位する。これが孝徳天皇だが、一応難波なにわに都を定めるものの、あちこち居を移したりして、政情は不安定を続けている。

その間、童女の鸕野がどういう生活をしていたのかについては全く手がかりがない。ただいえることは、当時子供たちは母方で育てられたから、母の遠智娘とともに、母方の家に身をよせていたのではないかと思う。

が、それから数年後、皇女が五歳になったときに、実家に悲劇がおとずれる。母の父、倉山田石川麻呂が、謀叛の疑いをうけて官兵に追われ、一族ともども飛鳥の山田寺で自刃してしま

ったのだ。数年前、同族の入鹿らを打倒した彼が、今度は追われる側に廻ったことについても謎は多い。同族の嫉妬か、それとも中大兄が利用するだけ利用して棄ててしまったのか……

しかも報せをうけて、皇女の母、遠智娘は、傷心のあまり病死してしまう。中大兄はこれを知りて歎いたとも、人の言を信じて石川麻呂を自殺にまで追いこんでしまったのを悔いたともいう。が、それも本心だったのかどうか……微妙な立場にある遺児たちは母にとりのこされた今、手放しで父の懐に飛びこめる状態ではなかった。それに、当時の習慣として、中大兄には多くの妻や子供たちがいた。母が亡くなったからといって、すぐ父の庇護を期待することはできない。母を失い、実家がほろびてしまったいま、二人の皇女——大田と鸕野は、ほとんど孤児同然で世の中に放り出されたのである。

その後しばらくの間、二人の消息はわからない。父方の祖母、宝皇女（のちの斉明女帝）がひきとって面倒をみたともいわれているが、いかに手厚い保護をうけたとしても、母やその実家の祖父母たちにかしずかれたようなわけには行かなかったろう。

実際に旅をする前に、すでに皇女鸕野の人生への放浪ははじまっていたのだ……。

鸕野皇女について、「日本書紀」はのちに書いている。

「天皇深沈トシテ大度アリ、（中略）帝王ノ女トイヘドモ、礼ヲ好ミテ節儉……」

底の浅い陽気さとか、軽やかなおしゃべりとはおよそ異質な物静かさ、どちらかといえば無

口な、それでいて、太っ腹で何を考えているかわからないところのある性格は、多分幼時の生い立ちと無縁ではないであろう。幼くして支えを失った彼女は、童女ながら容易に他に向かつて心を開こうとしない、用心深い少女になっていたのかもしれない。早く親に死に別れ、甘えることを知らずに育った人間のなかには、ひどく人なつくく、誰彼の区別なく体をすりよせて来るような人間もいるが、彼女は、みたされない愛を求めるよりもまず、幼いながらも大人と同じように一人で大地を踏みしめて立つてゆこうとするような、そんな感じの少女だった。

それから数年後、十三歳になったとき、彼女は姉の大田皇女とともに、叔父、大海人皇子のもととついだ。叔父と姪の結婚——今から見れば奇異に見えるが、当時としてはごくあたりまえのしきたりでもあり、また十三という歳が、とびぬけて稚なすぎたわけでもない。

そのころすでに孝徳天皇（輕皇子）はなくなり、その同母の姉であり、一代前の皇極帝の重祚の、斉明女帝である。皇居も飛鳥の板蓋宮いたがさのみやに戻っている。が、政情不安は決しておさまったわけではなく、皇位継承をめぐって、皇子たちの間には、ひそかな暗闘がくりかえされていたらしい。このとき、最も野心に燃えていたのは、皇女の父、中大兄だった。わが剣をもって蘇我氏を倒した実績もあるし、斉明女帝の長男でもある。が先帝孝徳の遺児、有間皇子ありまのみこをかつごうという勢力もあなどりがたくて、両者の間には決着がつきかねていた。しかもその暗闘はさ